



(3) ステージⅢ 中高連携教育

- 生徒間交流とつなぎ教材で、高校生活への適応を推進（大正・十和地域中高一貫教育）
- 生徒情報の共有で、高校生活への適応を支援

生徒間交流とつなぎ教材で、高校生活への適応を促進

1 学校や地域の状況

県中西部の連携型中高一貫教育校である。地域内の4つの中学校と連携を進めており、環境学習やふるさと学習、意見発表会、つなぎ教材の作成など中高や地域との連携を重視した教育活動を展開している。

2 取り組みのポイント

- つなぎ教材を作成、活用することで、高校の学習内容への適応を支援する取組
- 教員間の連携による指導力の向上と生徒間の交流による相互の成長を促す取組
- 豊かな地域教材（四万十川等）を中高連携の柱にした系統性のある取組

3 具体的な取り組み

<中高連携教育の全体的な取組>

- 基礎学力の定着と学力の向上を図る取組
 - ・教科部会の開催
 - 中高教員による教科の指導法や教材開発など情報交換・協議を行う
 - ・研究授業の実施
 - 中高教員の授業力向上のための授業交流を行う
 - ・四万十川の自然及び水質調査
 - 中高各学校で水質調査や研究を行う
 - ・高校生による出前授業
 - 高校生が連携中学校を訪問し、研究成果の発表を行う
 - ・四万十川 水の学習
 - 中高合同で四万十川源流域のフィールドワークを行う
 - ・ふるさと学習発表会
 - 各校で取り組んだふるさと学習の成果を、中高合同で発表する
 - ・つなぎ教材の作成
 - 英語、数学、国語の三教科でつなぎ教材を作成し活用する
 - ・意見発表会
 - 中高代表者による意見発表を行う
- 国際理解教育の推進を図る取組
 - ・英語暗唱弁論大会
 - 中高合同による弁論大会を行う
- 中高交流に関する取組
 - ・美術生徒作品巡回展
 - 中高各学校の作品の巡回展示を行う



<つなぎ教材の作成と活用>

中学校から高校への学習面でのスムーズな移行を目的として作成

- 英語・数学・国語の各教科部会がつなぎ教材を作成。
- 数学では、つなぎ教材テキストを中学校3年生に配付し、各中学校で学習。
- 国語は、3年生の春休み等を使い、つなぎ教材を活用して学習し、学習した教材を高校に提出。
- 英語では、単語集を利用し高校入学後に行う月曜テストなどに活用。

4 取り組みの成果と課題

中高教員による教科部会の開催や研究授業の実施等の連携を通じて、授業内容や教材開発、指導法について意見交換が行われ、教員の指導力向上につながっている。英語、数学、国語の三教科についてはつなぎ教材を作成しており、高校の学習内容へのスムーズな移行が可能となっている。高校生の出前授業やイベント等での中高校生の交流は、進路選択を控えた中学生にとっては、高校生の姿や活動が進路選択への大きな刺激となり、高校生にとってはイベントでのリーダーや中学生の前でのプレゼンテーション等を通じて確実に成長している。また、地域性を生かした教材を活用することで、中高共通のテーマでの学習を行うことができ、連続性のある取組が可能となっている。

一方で時間的な問題もあり行事日程の調整や部会等に参加できない教員に、今後どのように参加機会を確保するかが課題である。

5 普及のポイント

事例は連携型中高一貫教育校のものであり、その利点を生かした取組内容となっている。他の学校においては、地域の特色に応じて可能なものから連携・交流を始めることが大切である。

- 中高教員の交流の場を設定し、中高連携の必要性を確認する。
- 各学校、地域の実態に応じて可能なものから中高の交流を始める。
(例) 教員同士の情報交換会、生徒会・部活動での交流、公開授業など
- 地域の生徒の現状(学習面での課題など)を中高で確認し、つなぎ教材の作成等現状に対処する。

生徒情報の共有で、高校生活への適応を支援

1 学校や地域の状況

高知市内の進学校であり、県内全域から進学者がある。多数の中学校から生徒を受け入れているため、中学校と高等学校のつながりが薄いことから、高校生活への早期適応を目的として、高校教員が中学校を訪問し、情報を共有することを中心にした取組を進めている。

2 取り組みのポイント

- 高校教員が中学校を訪問し、新入生の情報を事前に収集する
- 事前の情報をもとに、新入生受け入れに向けた支援体制をつくる
- 仲間づくりプログラムによる高校生活への早期適応を支援する

3 具体的な取り組み

【高校生活適応支援プログラムの流れ】

3月中旬

- ・中学校訪問担当者周知会
- ・合格者登校日での事前面談等の広報

3月下旬

- ・入学予定者出身中学校への訪問
- ・学校訪問担当者報告会

4月初旬

- ・校内支援委員会の実施
学校適応面で課題があると思われる生徒についての情報共有と対応方針・対応策の検討
- ・新入生保護者面談（場合によっては生徒も含める）
- ・学年会の実施
校内支援委員会と面談の内容をもとに学年団で情報の共有と具体的な対応について共通理解を図る

4月中旬

- ・高校生活適応支援プログラム（2日間）

訪問の趣旨を説明し、出席状況や学習状況など気になる生徒について可能な範囲で話を聞く。



高校生活適応支援プログラム内容

【1日目】

- 1・2時間目 オリエンテーション
学年主任、教務部、生徒指導部、生徒サポート部から説明
- 3・4時間目 出合いのエクササイズ
各クラスでゲーム等実施
- 5・6時間目 合唱エクササイズ
校歌練習



【2日目】

- 1・2時間目 オリエンテーション
進路指導部、企画研修部、英語部から説明
- 3・4時間目 ホームフラッグ作成
- 5時間目 クラス対抗綱引き大会（ホームフラッグで応援）
- 6時間目 振り返りワーク

4 取り組みの成果と課題

中学校との情報共有により、入学当初のクラス編制をはじめとする事前の対応が可能となり、1年生の高校生活への適応がスムーズにできるようになった。2日間の適応支援プログラムは、生徒同士の仲間づくりを促進し、また教員にとっては、生徒観察の貴重な時間である。すべてを教員主導で行うのではなく、少し離れた位置から生徒を観察することで、積極性のある生徒や仲間に入れない生徒など様々な生徒の様子が見えてくる。このような内容をふまえて面談等を行うと効果的である。

一方、年度末の多忙な時期での中学校訪問は時間設定が難しく、2日間の適応支援プログラム時には2・3年生は授業を行っており、一部の教員の負担が大きくなるなど課題もある。

5 普及のポイント

○支援体制の確立

収集した情報に基づいて、対応方針・対応策を協議し、生徒、保護者、担当教員を支援する体制ができているか。

○時間の確保

年度末、年度始めの中学校訪問、適応支援プログラムの時間の確保ができるか。